

『あなたのそばにいます』

著：森本あき

ill：かんべあきら

キャベツを切り終わると、もう少し時間がかかるから、と言われて、理英は部屋に戻ろうとした。階段を上がる途中に、順之が立っている。

「何？」

「仲良く、する気なんかないから」

「分かってるよ」

理英はうなずいた。そんなの、最初から分かってる。あんなことされて、仲良くしてもらえるなんて、思うはずがない。

「でも、仲良しごっこはするんだろ？ だったら、俺もそれに参加して、何が悪い？」

初めて言葉を失った順之を見て、もっと嬉しくなってもいいはずなのに。

やっぱり、胸が痛い。最近、胸が痛いことが多くて困ってしまう。

「きみには、興味がない、と言った」

「俺は、おまえに興味がある」

理英は言い切る。

「あの学校で、おまえに興味がないやつなんていない。俺は、仲良くしたかった。友達になりたかった。でも、おまえがいやだって言うのなら、それでいい。でも、仲良しごっこは、俺もつきあう。かつみさんも父さんも、困らせたくない」

「友達？」

いつものように、冷静な声。

「そんなもの、なりたくないよ」

「だから、いいって言ってる」

「じゃあ、こうしよう」

順之はにっこりと笑った。みんなに向ける温かい笑顔ではなく、凍りつきそうな、冷たいそれに、思わず理英はあとずさる。

「家族でいるときには、ぼくはきみに優しくする。精いっぱい、ね。きみも、友達みたいにしてくれていい。そうだ。名前で呼び合うことにしよう。さっき、きみが言ったみたいに。だけど、それ以外のときは、なるべく顔を合わせないように、合わせたとしても、お互いいないかのようにふるまうっていうのは、どうだろうか」

どうして、そこまでしなければならないのか。

そんなに、自分のことがいやなのか。

そう思ったけれど、言葉には出さなかった。ここで言ったところで、肯定されるに決まっている。

「それで、かまわない」

「それじゃあ、そういうことで」

あっさりと、もう理英に興味なんかない様子で、順之は踵(きびす)を返した。その背に、理英は声をかける。

「今日、何で俺のこと見てたの？」

「今日？」

いぶかしげな様子 of 順之に、理英は続ける。

「休み時間。目が合っただろ」

「ああ、あれね」

順之はしばらく考えて、それから振り返った。

「男に、かわいい、とか騒がれていい気になってるのが、本当に自分の兄になったのかと思ったら、なげかわしくて、つい見てしまっただけだ」

「いい気になったことなんて、ない」

「だったら、どうして、いつもあの連中が周りにいるんだ？ きみが本当はいやがってない証拠だろ？」

「別にいやじゃない。どうせ、あれ、冗談だし」

「へえ、そう思ってるのか」

順之はバカにしたように理英を見下ろした。

「だったら、そのうち、痛い目にあって分かるんだろうね。連中が、本気だってこと」

「痛い目、って？」

「知らないわけないだろ？ 男だってね、犯されることは、あるんだよ」

はっきりと区切りながらそう言うと、順之は理英の顎(あご)に手をかけた。

「きみはこれだけ小さいんだから、力だって弱い。ぼくの手だって、振り払えないだろ？」

きつと、いやがらせなのだ。ああやって、自分たちが騒いでいるのが気に入らないから。

いや、そうじゃなくて。

自分の存在が、気に入らないから。

こうやって、わざわざ不安をあおるようなことをするのだ。

あいつらは、毎週のようにナンパに行き、コンパをし、そこでひっかけた女の子たちとさんざん遊んでいる。学校にいる間は女の子がいないから、自分をからかっているだけなのだ。

けれど、そう言ったところで、また何か言うに決まっている。

理英は黙って、順之の手を外そうとした。そんなに力を込めていないようなのに、全然外れない。笑いながら、順之の顔が近づいてきた。

「ほら、こうやって顎を捕らえたら、キスするのだって簡単なんだよ」

横を向こうにも、手を外そうにも、どっちもできない。

「外してみなよ。じゃないと、キスするよ」

「する気なんか、ないくせにっ…」

息が苦しい。喉なんか、押さえられてないのに。

「する気ない、って、どうして分かる？」

言った途端、口を塞(ふさ)がれていた。

温かい、その感触。初めての、他人の唇。

背(そむ)けようとしたら、顎に力を入れられた。唇が自然に開く。中に入ってきたのは、順之の舌。順之の舌が、理英の中をまさぐる。

キス、なんかでは、絶対になかった。

好きだからする、キスなんかでは。

これは、新しい意地悪だ。  
中をさんざんなぶられて、舌を何度も絡めとられて。唾(だ)液(えき)がしたたり落ちるほどにむさぼられたあと、やっと順之は理英を離した。  
「きみを犯すのなんて、簡単だろうね、お兄ちゃん」  
目を細めて、そんなセリフを言うと、順之は理英の唇を指でぬぐった。理英の体がびくりと震える。  
「これにこりたら、もっと用心することだね」  
バカにしたような声でそう言って、順之は今度こそ背を向けて、部屋へ向かった。その後ろ姿を見送って、理英は階段に座り込む。  
こんなにいやがらせをされなければならない理由が分からない。  
キスじゃない。  
こんなの、キスじゃない。  
こんなことで、傷ついたりしない。  
どうして、一瞬でも抵抗しようと思わなかったのだろう。絡まってきた舌を、噛(か)もうとしなかったのだろう。あんなに、されるがままになってしまったのだろう。  
そして。  
理英は、自分自身に手を当てた。そこは、いつもと違う様子を見せている。  
どうして、ここがこんなに熱くなっているのだろう。  
情けなさに、涙がこぼれそうになった。  
泣いたら、ダメだ。ここで泣いたら、かつみに気づかれる。  
唇を噛んで、涙をこらえた。  
こんなにきらわれていることが、ただ悲しかった。

本文 p47～54 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>